

第三部 意見交換・まとめ

パネリスト：奥田純子（コミュニケーション学院）

才田いずみ（東北大学）

細川英雄（早稲田大学）

堀井恵子（武蔵野大学）

司会：古屋憲章（早稲田大学）

■論文は実践研究に必要なプロセスか

古屋：それでは、再開します。パネリストの方に質問やコメントがいくつか、というか、たくさん寄せられています。まず、始めに全体に関わるものに関して、取り上げていきたいと思えます。これは全員に質問という形で「実践研究に論文は必要なプロセスであると思えますか」という質問がありました。これはたぶん、先ほどのお話では、論文化することという話と考えたりすることとか、協働することとか、場を作ること、両方の意味で実践研究が語られていたと思うんですが、それに関する質問ではないかと思えます。では、いいでしょうか。

細川：「実践研究に論文は必要か」という問いと考えていいんですか。

古屋：「必要なプロセスであるか」

細川：それは論文になる場合もあるし、ならない場合もあるしということじゃないですか。

ただ、考えるというところが出発点だと思うんですね。自分で実践をやって、それについて考える。「なぜ私はこういう実践するのか」で、「私はどういう実践をしたのか」というようなことを考えながら、ほかの人と共有しながら、どんどん進んでいくと論文化という過程になる。でも、論文化すれば、「はい、それで終わり」という話ではなくて、また、自分の実践に戻って考えるという作業になるんで、プロセスといえばプロセス。でも、論文にしないと絶対だめかっていうと、そういう話でもないと思えます。

堀井：論文の定義にもよると思えます。けれど、結構、核心的問いかなあと思えます。で、論文の定義が共有のための記述という意味だとすると、必要だと思うんですけども、いわゆる科学的な論文というところにそれが入るのかどうかというと、かなりいろいろな形態の論文があるので、そういう意味では必要ないんじゃないかというのが一つです。それから、ほかの質問とも関係するかもしれませんが、必ずしも、さっきも言いましたけど、あまりにも論文に縛られる、縛られる理由はあるんですけども、縛られすぎているのではないかと思うので、そこから抜けた研究というの、もう一つ考える必要があるんじゃないかなあと思えます。

奥田：日本語教育機関は、研究するところではない。実践するところ。そういう意味で言うと、論文は関係ないと思えます。しかし、私は、広い意味での論文は、書いたほうがいいと思っています。ただ、論文の定義によると思うんです。一般的な科学的知としての論文では、その分野の作法に則って、理論を検証する、もしくは生成することが必要で、そこでは実践報告は論文ではないということになります。その分野が規定している作法に則っているかどうか大きなことです。そうなら、私たちの言語でこういうことが論文だによってことを規定すればよいのであって、我々がそ

の作法を作ればよいと思います。で、書いたほうがなぜいいかというと、書くことによって、絶対的に自分がやってきたことを振り返らざるを得ない。漠然とやってきたことを書いてみると、不整合がいっぱい出て来る。人に読んでもらおうと、「ここ話が飛んでる」とか「なんでこのデータからこう言えるの」という指摘が来る。そういう意味で自分の実践をよりよくしたり、共有化をするためのツールとして、絶対にあつたほうがいいと思います。質的研究は研究論文になるか、学位が出るかっていうのは、論争としてよくありますよね。そのことと同じで、我々こそ、我々が言う論文は、こういうものであるという我々の言語で記述したものをまず作る、そういう勇気があってもいいじゃないかと思えます。

才田:もうあんまり言うことないんですけど(会場 笑)、書いたほうがいいっていうのは、今、奥田先生がおっしゃったように、自分の考えをまとめる、他人に伝えられるような形になっているかどうかを検証するという形で書いたほうがいいと思いますけど、それは論文という形になってなくてもいいかもしれません。何のために書くのかっていうことですね。例えば、昇進したいとか、別の就職先に行きたいとか、いろんなことがあつて論文を書かなくちゃっていうんだったら、論文にしたらいいと思いますし、別にそういうことないんですけど、自分のやってる実践について幅広くいろんな人に知ってもらいたいと思って、論文にするっていうのも、あつてもいいんですけど、それは一般的な論文っていう形じゃなくつても、例えば、いろんなところで発表する機会を得て、発表するっていうようなことでもいいかもしれませんし、いろいろなやり方はあるかなと思うので、必ずしもいわゆる論文という形にしなくてもいいかなと思いますが、なんらかの形で他人と共有できる形にするっていうことは、やらないと、たぶん自分一人の中で、自己満足に終わってしまったり、それから、自分の中で、改善、改善というのを重ねていくと、自分の教育観の問い直しみたいなこととか、さっき細川先生の話に出て来た「そもそも実践の内容がこれでいいのか」「何についてやってるのか」というようなことについての問い直しがないとか、いろんなことが起きて来てしまうと思うので、他者に自分のやっていることを知ってもらってという努力は、必要だと思いますけど、それは書かれたものを公表するっていう形でなくても、いいだろうと思います。

■リフレクションと他者との共有としての論文執筆のプロセス

古屋:今のお話ですと、要するに、自分の行った実践を対象に書くことっていうのは、一つは、自分のリフレクションという意味で、もう一つは、それを公開することによって、ほかの人と共有するという意味で、意味があることなんだというお話だったと思います。で、奥田先生のほうからは、論文の定義によるというか、つまり、「自分たちの作法を作ればいいじゃないか。そういう勇気を持つてはいいんだ」というようなお話もありましたが、ここで会場の方で、「いや、そうは言ってもね」みたいな(会場 笑)ことで、何かもう一つ突っ込んでお話ししたいという方がいらっしゃれば、発言していただければと思います。

武¹ : 私が質問したんですけれども、問題意識としましては、実践研究っていったときに、実践研究フォーラムでも、先ほどお話があったように、どういうふうに記述して、どういうふうに分析するのかという方法論について、最近、すごく、私も興味があるんですけれども、それをもっと勉強しなければいけないという考え方もあるんですけれども、その一方で、新しい考え方とか、新しい形を、実践研究というもので作り出そうとしているにもかかわらず、古い研究という概念に捉われて、それで関連する他分野からいろんなことを勉強しようということを、必要なんですけれども、自分もそうなんですけれども、何だか行ったり来たりしているような感じがして、それで実践研究というものを今まで考えて来られた方々が論文というものについて、どういうふうに考えていらっしゃるのかなというのを伺いたくて、この質問をしました。

堀井 : はい。最初の質問をこの質問にしてって言ったのは、たぶんそのうろうろ感はみんな持ってんじゃないかなと思って、取り上げてもらったんですけれども、少しそこは打ち破られるといいなという段階まで来てるんだと思うんですね。フォーラム自体、いわゆる研究にしなければ、いわゆる論文にしなければっていう意識は少しあって、分析をいろいろかじってみたりしたんですけれども、それはそれでいいんですけど、答えはたくさんあるので、みんなね。ですけれども、それにも縛られないで、奥田さんがおっしゃっていたような新しいものを作っていくか、解決できないものがあるんじゃないかなというふうに私は思っていますけれども。

武 : 自分も解決できてないから、わからないんですけど、わからないので伺ったということなんですけど、何か先ほどお話があったように、日本語教育の中で新しい実践研究というものはこういうものだというものができるといいなと思ったり、で、この実践研究フォーラムという場がそういうところになっていくとすばらしいなと思って・・・。

堀井 : で、その場合「できる」じゃなくて、みんなで「作りましょう」ということになってるんですね。

武 : そうですね、はい。

堀井 : ただあと、現実問題として、さっき奥田さんから出たように、採用とか、昇進の際には、いわゆる査読付の論文いくつとかいうのが、著書とかね、というのが、まだ現実的には大学等では認められているので、それはそれで現実問題としてあると思います。

古屋 : 奥田先生はいかがでしょう。というのは、僕は打ち合わせをしたときに、すごくよく覚えているんですけど、奥田先生がいろいろな業界によって、作法があると。で、その作法は必要だったら、覚えて使えばいいと。それは単なる武器でしかないわけだから、必要だったら使って、自分たちの分野では、自分たちの書き方ってものを構築していけばいいんだというようなお話をされたような気がするの、その辺を話していただければいいかなと。

¹ 武一美氏（早稲田大学）

■自分たちの土俵を作る

奥田：今、おっしゃったとおりです（会場 笑）。ここにいらっしゃる方は、多くが大学で教えていらっしゃる方でしょうか。日本語教育機関の方、ちょっと（参加者に挙手を求める）。結構、いらっしゃいますね。ありがとうございます。大学では、レフェリー付の雑誌に論文が何本出たかが業績となるわけですね。でも、日本語教育機関では、どっちでもいいわけです。日本語能力試験のN1持っているからって講義が聴けるわけじゃなかったりするし、持っていなくても聴けたらいいわけです。それと同じように、ある分野で必要なことができるかが大切で、そのときに教師なら自分の実践というものを記述して、それを他者に向かって説明したり、説得したりすることが必要で、相手は、自分自身かもしれないし、学習者かもしれない、採用してもらう機関かもしれない。大学やいわゆるアカデミズムでは、さっきいったような論文が必要かもしれませんが、例えば、留学生センターのような教育機関では、必ずしもそれを求めているまいだろうと思います。求められていることから考えると、何も隣の土俵で勝負する必要はない。ただ私たちは残念ながら、土俵を持ってないんですね。新しい相撲部屋一つ作るぐらいの、そういう気持ちで、実は『実践研究の手引き』を作りました。隣の土俵で禰借りてやるよりも、自分たちの土俵で、そこで勝負ができるものを持っていたいと、私は個人的に思っていましたし、今でもそう思っています。大学やアカデミックなところで、一般的に言われる研究に引っ張られていては、いつまで経っても現場の実践研究は、作法を持ってないし、あり得ないだろうと、思います。イノベーションを起こそうと思ったら、苦しいし、なかなか伝統から逃れられないことは絶対あります。でも、自分たちがやっていることを示そうと思ったら、みんなで団結して、それは別にみんなで戦う（笑）わけじゃないけど（会場 笑）、そういうことがない限り、例えば質的研究も認められなかったんだと思います。でも、だんだん認められるようになりましてよね。それと同じことを私たち自身がやらなければ、人がやるのを待っていては、永久に作法は作れないし、自分の禰も土俵もできないと考えています。よろしいでしょうか。

古屋：ありがとうございます。同じ点に関して、ほかの先生方は何かご意見がありますでしょうか。

堀井：みなさんに。

古屋：あ、今の奥田先生の発言に関して、何かコメントなどある人は……。はい。

佐藤²：アークアカデミーの佐藤と申します。奥田先生のお話は、とても勇気づけられるものがあるんですが、ただ日本語学校が大学とは違うというふうにしてしまっていていい、いいですけども、そうすると、単純な話、すごい現実的な話、日本語学校で論文を書ける人は、みんな大学に行きますよね。そんなことはないでしょうか。つまり、私は自分の現場について言いますと、研究をするということが私にとっては、あまり昇進とは関係ありません。でも、私は研究や発表をしたいので、発表しに行きます。で、それは、日本語学校教育、日本語学校教育ということばはないんですが、日本語学校教育は大学とは違うのだから、論文、論文はどんな形でもいいんですけ

² 佐藤正則氏（アークアカデミー）

れども、逆にそれを書けることは必要だと思うんです。そうしないと、ほかの分野、例えば、大学と連携した際にも、取り組んでいけないというか、相互交流できないようなことになって、だから、書けないでいいのかとか、それから、書ける者とか、研究をする者に対する日本語学校側の態度というのは、僕は自分の学校しか知らないんですが、あまりそれに対する考え方がないんじゃないかという気が常にしています。すみません、なんか文句言ったみたいで。(会場 笑)

奥田：そのとおりだと思います。日本語学校が大学と違うというのは、当然ですよ。(日振協は平成18年に)教員協議会を日本語学校教育研究大会に名前を変えて、教職員の発表の場にしました。日本語学校教育という一つの教育領域を作ろうということですね。つまり日本語学校教育というブランディングです。それを広く広めていくためには、連携も含めて、何らかの形で発信しなきゃいけない。そのときには、やはり書かれたもので「こういうことをやっています」あるいは「こういうことがありました」と言うことが必要で、それを、例えば、論文と呼ぶか、報告と呼ぶかは、また別ですけども、そのことについての、それを探るプロセスと、そしてそれを表現する方法、この二つについての日本語学校教育の作法を持ちたいということです。それから、学校の態度ですが、正におっしゃったことはそのとおりで、学校が研究を推奨するかどうか重要です。うちの学校は当然推奨します、はい(会場 笑)。で、予算もつけます。小さい予算ですけども、つけます。そういうようなことを機関が本当にやっていかないと、個人の力だけでは実際にはできません。それを一生懸命後押しするようなことを、日本語学校業界全体でもやらなければいけないと思います。頑張りますので、よろしく…(会場 笑)。

堀井：あの、ちょっと気になってたのは、最初から日本語学校の記述というふうになっていたんで、決してそれは分けてる、違うものだということではなく、まとめているのは同じなんですけど、たまたま流れとして二つになってた。ちょっとあそこが分かれすぎてるとなあと、私は思って、どっかでいっしょにならないといけないし、フォーラムなんか、今、すごく日本語学校の方もいらして、もっとそうなりたいなというふうに思っています。奥田さんが言ったのは、たぶん、大学よりもフリーな立場でできるというふうなことを言いたかったんじゃないかなあとあって、私は日本語学校にもいましたし、大学でもいますけれども、大学のほうが逆に今度は違うフリーさを求めて、実践をやるようになっている。昇進とかもういいから実践を頑張るんだっていうような自由さを持っている先生も実際いらっしゃいますしね。そのあたりはもう価値観の問題なので、もう何がなんでも、何とか長になるっていうのも一つの価値観ですけども、何をどこで何かというところに視点を置くと、日本語学校も、たぶん日本語教育機関っていうのに大学も入ると思うんですけど、(奥田：そうです。)はい、いっしょに考えていきたいなと思います。

古屋：そのほかに文句でも何でもかまわないんですが・・・(会場 笑)。

■WEB版『日本語教育 実践研究フォーラム報告』の位置づけと意義

藤川³：すみません。赤いストラップをつけている委員の藤川でございますが、決してやらせ質問ではありません。古屋さん、この後、WEB版報告⁴について、ご質問になるご予約はおありですか。

古屋：え、あ、何がですか。

藤川：WEB版報告。私どものWEB版報告。

古屋：あ、話題がですか。

藤川：ええ、はい、記述が、今、話題になってるじゃないですか。

古屋：あー。

藤川：そうでなければ・・・

古屋：そうでないです。

藤川：ここで質問させていただきます。時間をとってもらえたらと思うんですけど。何が言いたいかと言うと、今の先生方のお話の文脈、そして、武さん、佐藤さんがおっしゃってくださった中で、実践研究フォーラムのWEB版報告。最初に細川先生が触れてくださいましたけど、それはもうやっていますよね。で、いわゆる査読がない発表の場ではあると思いますが、私たちのWEB版報告っていうのは、奥田先生がおっしゃったような新しい相撲部屋になり得ているのでしょうか。あるいは、新しい部屋を目指しているのでしょうか。ちょっと触れていただければと思います。

堀井：あまり相撲部屋には…(会場 笑)。いろいろな形で、今も学会の学会誌とは違うものではあると思いますね。それを今度、新しいものになるかどうか、していくかどうかは、わからないんですけど、皆さんと一っしょに考えていくことになるので、たぶんWEB版が何かというイメージがわからない方が多いと思うので、この場では難しいかもしれませんが、少なくともこれからWEB版の原稿を書く方とか、そういう中で見て、少し新しい視点ということも合わせて考えていくといいんだと思いますけど。いいでしょうか。

細川：今のご質問は、結構大きな問題だと私は思っています。というのは、私が委員をしていたときに、WEB版を立ち上げたんですけども、そのときに「査読をしてはならない」ということが学会の常任理事会から降りて来たんです。で、私はそれに猛反対をして(笑)、常任理事数名とかなり長いこと時間をかけてやり合いました。でも結局、学会としては、「査読をしないで欲しい。査読をするのは、学会誌『日本語教育』だけだ。学会に学会誌は一つでいい」という意見が当時の常任理事会の統一見解でした。私は「それはおかしいんじゃないか。いろんな場があってもいいはずだ。いろんな形態のものがある方がいいはずだ。査読をするかしないかは、それぞれの場所で考えて、学会としてはそれを緩やかに統合するというだけでいいんじゃないか」という意見を述べましたが、これは全く受け付けられませんでした。しかし、とにかく公開するということは絶対に譲れないとがんばって、今のWEB版の報告集が出来上がっているんです。これはもちろん別に当時の理事会を批判するこ

³ 藤川美穂氏(学習院大学, 2007-2011 日本語教育学会研究集会委員)

⁴ WEB版『日本語教育 実践研究フォーラム報告』

<http://www.nkg.or.jp/kenkyu/Forumhoukoku/kk-Forumhoukoku.htm>

とが目的ではありませんが、やっぱりそういうことを学会としてしっかり議論していくことをしないと、日本語教育そのものが非常に無力化していくというふうに思っています。それは先ほど申し上げた「日本語教育の実践がからっぽである」ということと連動していて、私の中では、とても強い危機意識としてあります。

才田：もう言わなくてもいいかもしれないんですけど、WEB版のことは、これから学会の中で位置づけは変わっていくんじゃないかと思います。最初のスタートのときは、確かに細川先生がおっしゃるように、結構、学会の中であれだけの論争がという、珍しいことだったと思いますけれども、WEB版の実績っていうのを積まれて来て、そして、実践研究フォーラムも回を重ねてきているので、見直すっていうことは十分あり得ることじゃないかなというふうに思っています。それから、もう一つ、日本語学校の新しい土俵を作るっていうこと、それもすごくいいことで賛成なんですけれども、そのことと違う土俵の人とどういうふうに連携していくか、勝負していくかっていうようなときの話っていうことなんですけど、日本語教育っていう分野自体が、比較的伝統的な学問領域の中では新しい分野で、日本語教育学っていうのが認められるか認められないかっていうことについても、始終論議があったりするわけですね。それで、日本語教育の領域を一つの学問領域として認めてもらおうとか、市民権を得ようっていったときに、どういうことをやっているのかっていうのを外側の人に対して、通じるような形で出さなきゃいけないっていうことがあったと思うんですね。それで学会誌の『日本語教育』なども、よそに出して「こういう変な学会誌なの？」っていうふうなことを言われないようにっていうので、肩肘張って頑張っちゃってたところっていうのがすごくあると思うんですね。だから、もっと独自の領域の独自性っていうのを出してもいいんじゃないかっていうふうに、ある程度冒険ができるようになるためには、ある程度認知されて位置が定まるみたいなことがないと、冒険をすると危ないっていうことが、たぶん学会全体としては、あるんじゃないかと思います。で、日本語教育学会も今年で、何年だっけ、40周年じゃなくて、もうそろそろ50年になろうとしているので、ある程度は認知されてきたかなと思うんですけど、前、昔というか、それほど昔じゃなくても、隣接領域から、日本語学とか、言語学とか、国語教育とか、いろんな隣接分野から一人前の学会として扱われてこないっていうことは過去にはあって、今、いろいろな学会と連携をするっていうようなことも行われるようになってきました。ですから、だんだん市民権を得て来ているというので、これから新しいあり方っていうようなものも出していけるってことがあると思いますね。それと同じように日本語学校で大学とは違う研究成果の発表の仕方っていうのを模索していくって言ったときに、日本語学校でやっていることが、もう本当に現場に根差したことで、それはすごく大事なことだと思うんですね。さっき私が見せましたように、日本語教育の研究で現場に還元されないものは意味がないと、私は思っているのでも、現場に根差した研究がすごく重要で、日本語教育の柱であると思っているんですけど、その現場に根差したものを即座に普遍化できないからといって、「これは非科学的である」みたいな言い方をするのは、すごくまずいことだと思っています。で、それを新しい形を出していくっていうのはいいと思うんですけども、「新しい形を出したからいいじゃ

ないか」って言っている状況ではまだないと思うんです。だから、新しい形も模索しつつ、古い形でも必要なときには出せるというような二段構えにしておかないと、「新しい形でやっていくから、私たちはちゃんとやっていますよ」っていうような形でだけ勝負しては、ちょっと周りからはまだ認められないということがあるかなあと思うので、二段構えでやるのもなかなか大変ですけども、伝統的なお作法っていうものも知った上で、そっちで扱うこともできるし、非常に革新的なやり方で自分の実践の研究結果を伝えるということもできるんだっていうような、そういう幅の広さみたいなものも、あるといいなと思います。まあ忙しいから、大変かもしれません。

奥田：すごい見たこともないような土俵を作ろうとか(会場 笑)、そこまでの革新的なイノベーションでなくてもよくて、おっしゃるとおりだと思います。『実践研究の手引き』を作るときに一番最初に問題になったのはどんな仕掛けをしたら実践が見えるかということでした。自分の文脈、自分の教えている教室だとか、学習者だとか、やっていることは自分は知っているわけで、学校へ行けば、いつも大体同じ顔だから、お互い阿吽でわかります。「あのときのあれどうする?」「あ、それでいいんじゃない?」みたいなことでほとんどOKです。ところが、そのことを隣の学校の人に伝えるとなるとなかなか上手いきません。自分がどういう前提を持ってこの内容を選び、どんな方法をチョイスしてどうやったか。すると、学習者からこういう反応が出たから、そこでもう一回こんなことをしたということ、文脈を共有していない人に伝えるのは、実はすごく大変なことです。報告が独りよがりだっていわれるのは、そのために、いかに文脈も状況も違う人たちに伝えていくのが、基本だろうと思うんです。じゃ、そのことを踏まえたものは論文になるのかっていうと、ならないわけです。だけれども、まずそれがなければ、共有はできません。前提としていることがこういうことだから、それは細川先生もおっしゃったように、こういう内容にしたんだとかいわなければ、前提は見えません。水面下にあって実践を規定している部分とその規定の上にある、何をやったかの全体をそこにいない人にどうやって伝えていくのか、これはすごく難しいけれどこの能力がなければ共有はできないと思います。実践研究なり、実践の報告なりを外へ発信するための基本だと思います。だから、土俵ってそんなすごいものでなくて、そういうことだと思います。書かれたものは一般的に言う論文でもなく、事例の報告でもないかもしれません。実践研究は逆に言うと大学で日本語教育やっている人たちが、自分たちのやっってることを、大学じゃないところで日本語教育やっってる人たちに、きちんとわかってもらうための仕掛けでもあると思います。で、WEB版ですけども、今後どんどんそういう時代になるだろうと思います。日本語学校の中ではまだそこまでいってなくて、「そうしよう、そうしよう」と言いながら、15年ぐらい言ってるわりに、まだできていないなと反省しています。この学会のフォーラムで、WEB版が出ることを日本語学校の先生方にも知っていただいて、先生方がそこに報告を出すことが必要だと思います。査読がないという話でしたけれども、私は査読ってことじゃなくて、さっき言った「この文脈にいない人にわかるのか?」という視点で見ると必要だと思います。落とすとか、査読というのではなくて、よりよく共

有するために必要ならアドバイスをし、書き直してもらって載せていくという段階があったほうが良いと思います。

堀井：ちょっと変わりますが、(日本語教育学会テーマ研究会の)アカデミック・ジャパニーズ・グループ(AJG)のWEB版⁵っていうのも同じように学会で査読をつけてはいけないというところからスタートしたんですけれども、アドバイザーということで寄り添う形でやっていて、たぶんそれも一つの新しい形かなと思います。それから、ちょっと話違うんですけど、私は今回は、「連携」というラウンド・テーブルを担当していたんですが、そこには、日本語学校でもなく、大学でもなく、地域の活動をしている方とか、ビジネスの企業の中で活動している方というのも含めて、本当にもっと広い範囲のことも考えていく必要もあるかなとちょっと思いましたので、加えます。

■内容あつてのスキル、スキルあつての内容

古屋：では、先生方に個別に質問をいただいているというのがありますので、それをちょっとお答えいただければと思います。では、細川先生から。

細川：個別にも二ついただいていますけれども、たぶんそれをお答えすることによって、今の問題とも絡むと思います。一つは、「アクション・リサーチの問題と実践研究の問題に共通点があるというお話がありました。もう少し詳しくお願いします」ということと、もう一つ「実践研究がスキルや方法の習得になっているのは問題だ。内容そのものを問うべきというお話だと理解したのですが、内容とは具体的にどういうことでしょうか。また、スキルや方法の研究だけでは、よくないのか。スキルや方法の研究はよくないのかという、そこについてご意見をお聞かせください」というご質問をいただきました。私は、別に二元論を唱えているわけではないんですけど、「内容あつてのスキルだし、スキルあつての内容だ」というように考えています。ですから、どっちがどっちだということではないのですけれども、ただ、スキル、いわゆる方法にだけ焦点化すると、内容が見えなくなると考えています。内容というのは、実践の中で具体的に何をやっているか、ということです。さっきアクション・リサーチの批判をちょっとしたのは、アクション・リサーチはもともと社会変革のための実践で、それを更にリフレクションすることによって、よりよい社会のあり方を考えていく。そして、更に社会変革を進めていくという、そういう理論的な背景があつて、そこから始まったものだったにもかかわらず、教育の分野に入ってきたときに、それが方法論に特化してしまった。とくに日本語教育、英語教育に入ってきたときに、それが完全に方法論化して、実践の中で何をやっているかは見なくなった。方法だけを見ていくと、そうになってしまう。やっぱり大事なことは、その中身、教室で何をやっているかっていうことだと思うんですね。さっきの私の話との関連で言えば、「それぞれの現場でどんなことをやっているのか、何をやっているのか」ということです。例えば、日本語学校では、日能試の1級に

⁵ 『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル(略称:AJジャーナル)』
<http://www.academicjapanese.org/journaltop.html>

合格させるための受験勉強をしているというならば、「なぜそれをするのか」ということを問わない。「学校が要求するから」というのでは理由にならない。じゃ、本当に、大学は要求しているのかとか。「大学が要求するから」という前提を問題にしないのでは何も始まらないということです。本当の意味での内容、つまり、「日本語教育の仕事って一体何なんだ」ということを我々がしっかり中身を見せ合いながら議論していかないと、前に進まないと思います。だから、それを見ないようにして、質的研究がどうだとか、どう分析したらいいとか、何々法があるとかっていうことを一生懸命やっても、結局は元の木阿弥になるということが言いたいのです。ですから、それを打開していくための一つの間として、フォーラムは非常に有効な場ではないかというふうに考えているわけです。すいません、しゃべりすぎました、やめます（会場 笑）。

■議論の中でつっこみながら考え、更新していくことの大切さ

堀井：はい、私への質問も大体括れるのか「新しいパラダイムへ転換する必要性への指摘があり、研究方法が具体的にどのような形か」とか「やっぱり新しい形でというふうなお話がありましたが、もう少し具体的に」というようなことが多くて、今回のフォーラムでみなさんラウンド・テーブルに参加されたと思うんですが、ラウンド・テーブルに参加して、もちろんいろんなことがあったと思うんですけども、その中で気づいたこととか、発見したこととか、学んだことっていうのは、各自各自、少なからず、かなり多くあったんじゃないかと思います。そのときのコーディネーターとして入ったんですけども、みなさん実践研究として出されてきたもの、さっき最後に「応募とのギャップ」というのを出したんですけども、この中には「何をしたか」ということ、で、「どうだったか」というのは書かれてるんですが、「なぜそれをしたか」、いわゆるデザインという部分は、すごく抜けているものが多くて、これは本当にさっきも言ったように日本語教師は忙しいので、日常の業務をこなすことで、とても頭がいっぱいになってしまうと思うんですけども、そこから少し、こういうフォーラムのような場所で現場から離れて、「なぜするのか」ということを考える。それから、これはもうちょっと大きい、奥田さんのほうからもありました、細川さんも言ってましたけど、教育哲学、「自分はどのような教育哲学を持って、その実践をするのか」というところを考えない実践は、すごく多いんですね。そうすると、なんかその場その場で何か見てきたら、それに流されて、右に行ったり左に行ったりということがあって、すごく一生懸命やってるんだけど、右往左往になってしまう。で、もう一度そのところをこういう場で、議論の中で、「なぜするのか」とかをつっこみ合いながら、考えていくことで、それはまたどんどん更新されていくものだと思うんですけども、そういう場っていうのがとても大事だと思う。それで、私が思ってる新しい研究っていうのは、最終的にそれが記述されればいいんですけども、そうじゃなくて、この生きているこの場でいろんなものに気づいたり、いろんなものが生まれたり、更新されたりしていく。新たな視座というものが出て来ることを研究っていうふうに考えてもいいんじゃないかなあというふうに思っているということです。何かあれば、どうぞまたご質

問いただければ。

■「一体私は学習者に対して、何をしているのか」という問い

奥田：「日本語学校の研究の質みたいなものは、セミナーが行われた97年、98年とあまり変わってないんじゃないか。それをよくしていくには、どうしたらいいか。フォーラムにもっと日本語学校の教師が関わってくるには、どうしたらいいか」という質問をいただきました。どうしたらいいでしょうね。私は確実にいわゆる実践研究は、よくなってきていると、思います。いろんなところで、発表したり、報告を書く中で、上がってきたと思います。質をあげるには、よい質問をすることでしょうか。これってどういうことときいてみる。批判するんじゃないで「今言ったことは、どういうこと。それはどうして。なぜこれ選んだの?・・・」というように。質はそういう日々の同僚性の中から出て来るだろうと思います。その同僚性を、ティームティーチングをしている人から、学校の中の違う担当者であったり、隣の学校の人であったり、あるいは大学の人であったり、ビジネス日本語を教えている人材派遣系の人だったりっていう形でどんどん広げていく。そのときにあまり片意地張らずに、まずはお互いにより質問をして、理解しようとする協働性というところからはじめればいいのではないかと思います。はじめに言いましたように、研究の質は結構上がっている。当時よりすごくよくなってきたと思います。けれども、相手にきちっと説明するまでにはなっていないかもしれません。自分の問題点をきちっと言語化して、相手に伝えることは本当に難しいと思います。そういうことがなかなかできないときは、お互いに「それってどういうこと?」ときき合う、そういう輪がだんだんだんだん広がっていったらいいと思いますし、この実践研究フォーラムもそういう場になればいいなと思います。日本語学校の教員の会や、いろんなところで、「あそこに行ってよかったよ」って、口コミで伝われば、「じゃあ、行ってみようかな」ということになります。遠い先生は、たとえ交通費の半額でも機関から出してもらおうとか、そういう協力も取り付けて、口コミで人を誘っていくというのがパワーになると思います。最後に、これは細川先生、堀井先生、才田先生とも共通しているなと思うのですが、やっぱり自分の教育に思想が必要なんだと思います。「なぜ、これやってるの?」って問われたときに「この人が大学へ行きたいと言っているから」では答えにならないと思います。「一体私は学習者に対して、何をしているのか」ということを、たぶん暫定的な答えを持ちつつ、一生問い続けるんだと思います。そういうことを基底にした教育であり、実践であり、そういうことの記述が必要だと思います。そして、お互いに「それはどういうこと?」とよい質問をすることで、前に進めていく。それをこのフォーラムなどで、教師の協働性を通して違う社会にいる違う立場の人たちにもつないでいくことも大切だと思います。日本語教育界だけの内向きのことではなくて。そういう可能性も実践研究にはあるんじゃないかなと思いました。以上です。

■当該現場だけでない還元

才田：私は二つご質問をいただいでいて、一つは、全然関係ない「大震災はどういう影響

がありましたか」(会場 笑)という質問なんですけど「日本語教育に何か影響が？」ということで、学習者が帰ってしまったとか、それから、たぶん宮城県とか福島県には、前のように学習者が来にくいだろうというようなことで、大きな影響はこれから出るんじゃないかと思います。それから、地域の日本語教室などでも、存続が難しくなったところもあるし、また、逆に地域に日本語教室があったので、外国人市民の方たちがどういうふうになっているのかっていうような情報把握が行政のほうに上がっていったというような点もありますし、日本語教育に対して、この震災、大きな影響がございました。それが一つですね。それから、もう一つは、先ほどのお話と重なるとは思いますが、「よい研究は現場に還元できる」というふうにさっき私が申しまして、「それは当該現場だけではないということを行ったけれど、それをもう少し詳しく」ということなんですけれども、これはさっきの奥田先生の話なんかとも、重なるとは思います。非常に具体的に、自分の現場がどういう条件で、どういう人に対して、どういうことがあって、それで自分がこういうふうを考えて、こういう内容のものを、このような形で研究をしたところ、学習者がこのように反応したとか、上手になったとか、上手にならなかったとか、いろいろなことがあるわけなんですけど、そういうことを他者に伝えるっていうことをしたときに、聞いた側はその方と全く同じことを自分の現場でするっていう。ちょっと、即座にしちゃうっていうそういう人いるんですね。教案みたいなものを提示して、こうなので授業をやったっていうようなことを言ったら、そのとおりの教案で自分の現場でやっちゃう人とかっていうのが、ときどき。日本語教師だけじゃないですよ、これは。国語教育なんかのもので、出版されてるものの中にも、大村はま⁶先生の実践をそのままやってみましたっていう、もうあほの先生の話は載っていて(会場 笑)、驚くべきことだと思いますけれども、そういう人のやったことをそのまま真似して、自分の教室にそのまま持ち込むっていうのは、いろいろ無理がありますよね。自分の学習者は、その人の学習者と違うし、学校のやり方もポリシーも違うかもしれないし、その方と私の教育観も違うかもしれないし、いろいろ違うことはあるけれども、その方の実践の話を聞いて、「あ、私は今まで自分の学習者にこの人みたいにこの部分はどうかっていうこと問いかけたことが一度もなかったけど、ひよっとしてきいてみると、私の学習者からも何か今まで聞いたことないような反応が出て来るかもしれない」とか、そういういろいろなヒントみたいなものが具体的な実践の話を聞くと、自分の教室に持って帰れる、あるいは自分の実践の中に取り入れてみてもいいかもしれないと思うような小さい種みたいなものがたくさん手に入ると思うんですね。で、それをやってみると、自分の現場は、今まで自分でわかってたと思ってたけど、実は聞いてみたら、わかっていなかったところがある、というようなことが、出て来るかもしれない。だから、そういうことが「当該現場じゃないところに対する還元」という意味で言っているわけで、この実践研究フォーラム

⁶ 1906-2005 国語教育研究家。神奈川県出身。東京女子大卒。東京府立第八高女、戦後は深川一中など新制中学の国語教師をつとめる。52年間の国語教育から、大村単元学習として知られる授業方式を生み出した。その業績で昭和38年ベストロッツ賞を受賞した。著作に『大村はま国語教室』『教えるということ』などがある。

の場に来てらっしゃる方は、ここでいろいろな共有をして、そこで得たものの中から、ご自分でいろいろ考えて、自分の現場に何か新しいものを持ち込むというようなことをたぶんしてらっしゃると思うので、この場に来てらっしゃる方は、もうわかかってらっしゃることだと思えるんですけど、そっくりそのままがどこにでも使えますよということを言っているのではなくて、個別、具体的なものを丁寧に記述することによって、その中に潜んでいるいろいろなものについて、様々な別の条件の現場にいる方にとっての役に立つ種がたくさんあるだろうという、そういう意味で「当該現場だけでない還元」ということを申し上げたということをちょっと補足しておきたいと思います。

古屋：共有とか伝えるということがキーワードなのかなと思ってお話を伺っていました。結局、僕たちは超能力者じゃないので、何も話さなかったり、書かなかったりしなければ、共有とか伝えるとかできないわけですね。自分にだって、わからないかもしれないですね、言語化してみなければ。だから、そのためには、何らかのレベルで表現をする必要があるということなんだと思います。で、そのレベルが同僚であるかどうか、文脈をどの程度共有しているか、全然共有していないのかによって、少しずつ変わっていくということだし、あと、そのためには、やっぱり一人では難しくって、さっき奥田先生がおっしゃったように、「それってどういうこと？」ってきき合える場みたいのが必要なんだろうな。そういう場とか、考えることとか、表現することとか含めて、実践研究って呼べばいいっていうふうに、個人的に思いました。それでは、ちょっと時間を過ぎてしまいましたけれども、パネルセッションを終わりたいと思います。4人のパネリストの先生方、どうもありがとうございました（会場 拍手）。また、最後まで積極的に参加してくださった会場のみなさんにもお礼を言いたいと思います。どうもありがとうございました（会場 拍手）。